

フェリス女学院大学の英語インテンシブ・コース に対する学生の意識と今後の課題 —アンケート調査にみる少人数教育の評価—

佐 藤 あずさ

1. はじめに

日頃自身が嘱託教員として英語インテンシブ・コース（以後英語インテンと表記）の授業を行う傍ら、英語インテンの教材選定やシラバス作成などに携わってきた。その中でFD会議や日常の交流を通して非常勤講師の英語インテンの取り組み方や改善点をくみ取りながら、よりよいコース作りを目指している。しかし、このように教える側からの意見は聞く機会があるのに、学生側からの意見が届いていないことに気が付いた。実際フェリス女学院大学では毎セメスターの終わりに、学生に対して「授業に関するアンケート」をフェリス・パスポート（学生と教職員が使用する授業・学習支援のポータルサイト）上で実施している。「この授業で扱っている内容は、あなたにとって難しかったですか、簡単でしたか。」「この授業での説明は、あなたにとってわかりやすかったですか。」「この授業は、あなたにとって、就職活動に役立つタイプのものだったといえますか。」「この授業は、あなたにとって、外国語の運用能力を習得するタイプのものだったといえますか。」など32の質問があり、最後にコメントがあれば記載できるスタイルのアンケートだ。アンケートの結果を閲覧できるのは現在担当教員のみである。その上、内部資料によるとこのアンケートの回収率は良いとは言えない。もし他の教員による結果の閲覧が可能となったとしても、学生側の英語インテンに対する意見を理解し、コース改善へ反映させるために、このアンケートから十分な意見を吸い上げることができるかは疑問である。この現実を踏まえ、英語インテンに対する学生の期待、要望、提案を探ることで、英語インテンの現状を知り、さらなる改善を目指せるように、今回学生に直接英語インテンに関するアンケートを実施するに至った。

英語インテンは1996年度から導入され、この2017年度で22年目を迎える。本学の「外国語に強いフェリス」を实践する「先進的な言語教育」の一環である。「少人数クラスで徹底指導」とともに、本学ホームページには以下の紹介文がある（2017）。

英語インテンシブ・コースは、18名程度を基本単位とした習熟度別の少人数クラス編成で、1・2年次を中心に集中的な語学トレーニングを实践します。TOEFL iBT79－80(PBT550)点以上を目標に高度な英語運用能力を養成します。

英語インテンの履修を希望する学生は、1年前期中にプレイスメント・テストを受け、上位180名がその成績によって10のレベル別クラスに振り分けられる（成績の低いAクラスから一番高いJクラス）。1年後期に6クラス（Speaking、Listening、Reading、Writing、Language Development、講読）、2年前期に5クラス（購読以外）、2年後期に5クラス（基本4スキルと購読）、3年前期に2クラス（Speaking、Reading）の5セメスターに渡って合計18クラスを履修する。すべてのクラスで単位を獲得すると修了証が発行される。プレイスメント・テストとクラス替えは、学年の変わる1年後期、2年後期に行われ、その都度成績でクラスが分けられる。

2. 方法

アンケートは、Googleを使って作成し、指定のWEBアドレスにアクセスすることでアンケートに答えられるインターネット・アンケート調査方法を利用した。「英語インテンシブ・コースについて」という表題で、質問は日本語で8項目28質問にわたる。最初の項目では、学生の学年と英語インテンを選んだ理由をたずねた。第2から第6項目にかけ、各スキルの授業の満足度や要望などをきいた。第7項目では、レベルとプレイスメント・テストに対する意見をたずね、最後の項目では、英語インテンをやめたいと思ったことがあるか、続ける理由は何かと、履修相談で学生から相談されることを逆に質問として問いかけた。

2017年7月10日から20日までの10日間に渡ってアンケートを実施した。これは前期13から15週目にあたる。英語の嘱託教員の協力も得て、フェリス・パスポートでの掲示または授業内での告知により、英語インテンの履修学生に授業外の時間を使ってアンケートに答えてくれるよう促した。アンケートを実施する時点での英語インテンに在籍する学生数は、1年生0人、2年生155人、3年生126人の合計281人である。

アンケートのはじめに「匿名になるので、安心して答えてください。」と記載し、アンケートに答えることで成績などに不利にならないことを伝えた。

3. アンケート結果と分析

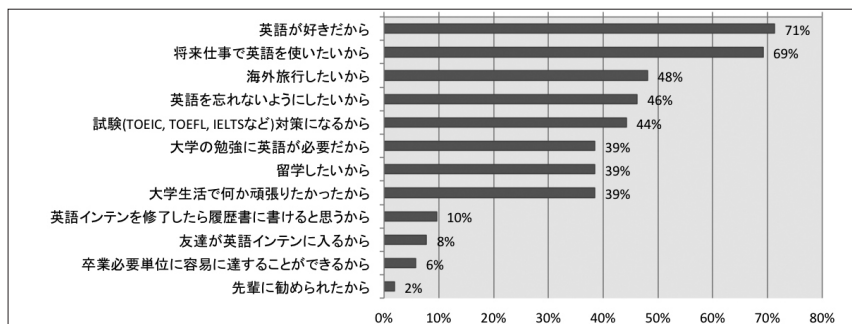
回答のあった52名（英語インテン履修者の18.5%）の内、45名（86.5%）が2年生で7名（13.5%）が3年生の英語インテンの履修学生であった。

(1) 英語インテンに入った理由と期待

英語インテンに入った理由として、全体の70%前後が「英語が好きだから」「将来仕事で英語を使いたいから」の2つを挙げている（図1）。続いて、全体の約半数の学生が「海外旅行したいから」「英語を忘れたくないから」「試験（TOEIC, TOEFL, IELTSなど）対策になるから」の3つを理由としている。上位5つの理由から、学生は今英語が好きで、英語をこれから長い間触れて続ける自分の姿を思い描いていると読み取れる。「大学の勉強に英語が必要だから」「留学したいから」「大学生活で何か頑張りたいから」と、大学在学中の自分の姿を目標とした、短期的な英語学習を考えて英語インテンに入ろうと思ったのは、全体の半数以下に留まることが分かった。

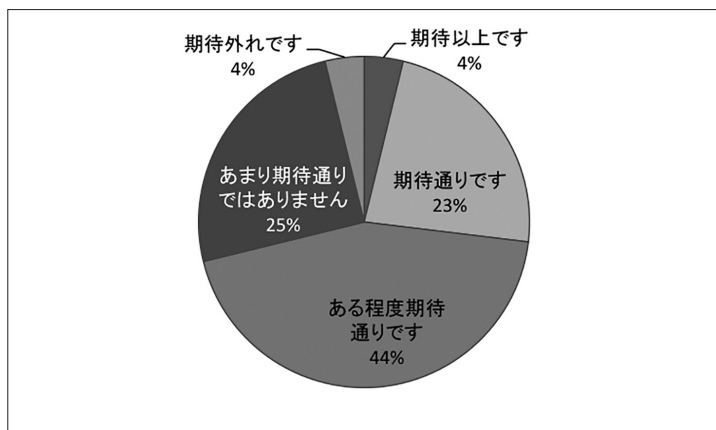
その他として「英語のスキルをもっと磨きたいから」「これしか選択肢がなかったから」「大学では英語を専門的に学びたかったから」のコメントが寄せられた。フェリスの英語教育に期待する学生の姿が想像できる一方、履修の選択方法などを再度確認する必要があることも分かった。

図1：英語インテンに入ろうと思った理由はなんですか。（複数回答、コメント可）



アンケートの回答の大半を占める2年生は、この時点では英語インテンの2セメスター目を終わろうとしているときであり、3年生にとっては英語インテン履修最後のセメスターの終わりである。英語インテンが、今のところ期待通りか聞くと、71%がある程度期待通りあるいは期待以上であると答えた（図2）。

図2：今のところ英語インテンは期待通りですか。

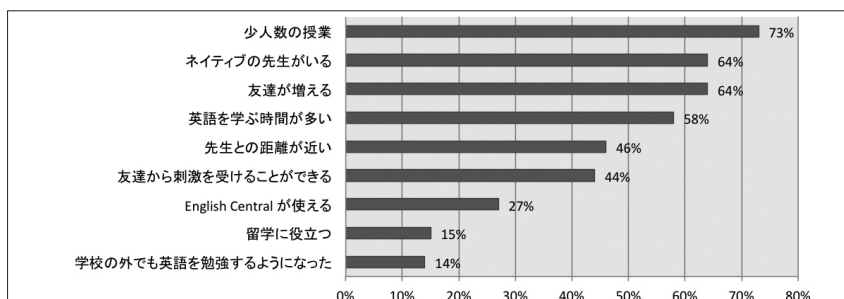


学年別に見ると、2年生の71.1%、3年生の71.4%がある程度期待以上であると答えた。英語インテンに対して、学生がポジティブに評価していることは、現在

のコース運営には嬉しい知らせである。しかし、約4分の1の学生が期待通りでないと感じていることに対して、早急に原因の解明し、コースの改善につなげていく必要がある。

今までの英語インテンで良いところをきいた結果、「少人数の授業であること」が1番に挙げられた（図3）。この結果は本学が掲げる少人数教育に対し、学生側からも評価があることが裏付けられた。続いてネイティブの先生がいること、友達も増えること、英語を学ぶ時間が長いことがインテンの良いところだという回答を得た。学生は、友達と少人数でリラックスできる雰囲気の中、ネイティブの教員の指導をインテンの最大の利点と考えているようだ。

図3：今までの英語インテンで良いところはどこですか。（複数回答、コメント可）

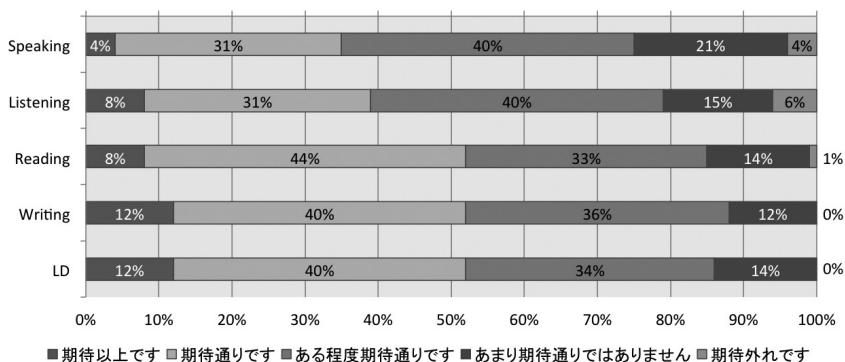


その他のコメントとして「英語でのライティングや、プレゼンテーションの方法を学べる」という記載があり、具体的なスキルの習得を英語インテンの特色だと捉えている一面も分かった。

(2) スキル別

次に5つのスキル別授業（Speaking、Listening、Reading、Writing、Language Development）に対してアンケートを行った。各スキルの授業について、どの程度期待通りかを聞いたところ、すべてのスキルにおいて75%以上がある程度期待通りあるいは期待以上であるという結果が出た（図4）。このことは、学生に英語インテンの授業が好意的に受け入れられることをさらに裏付けるものとなった。

図4：今までの各スキルの授業はどうか。



(2-1) Speaking

Speakingの授業について75%が期待に沿っているとポジティブな評価をしているが、これは5つのスキルの中で一番低い。「あまり期待通りではない」と答えた学生が21%に上ることを重く受け入れなくてはならない。

今までのSpeakingの授業で良かったことを自由記載で尋ね、「特になし」を抜かして30の意見をきくことができた。そのうち9つの回答にネイティブの先生がよかった、ネイティブの先生の授業内容がよかったとコメントがあった。同様の内容で日本人の先生については2件あった。クラスメート同士で話すことがよかったとのコメントは5件あり、発音がよくなった、発音を意識するようになったとの意見も5件あった。

Speakingの授業の改善点も自由記載で尋ね、「特になし」を抜かして22の意見が書き込まれた。最も多い意見は、「もっと実践的なものをやりたい」だった。次に、もっと話したい、フリーで話したいと続き、学生の積極性がうかがわれる。他に、日本人の先生はやめてほしいという回答がある一方、課題は日本語で説明してほしいという意見もあった。先生に一对一で指導を受けたいというコメントも2件あった。

教員に対しては、いささか“ネイティブ”を希望する傾向があるものの、ネイティブ教員と日本人教員ともに良い評価があることから、どちらの教員が担当

するべきだという結論にはならない。また、「発音」の学習をよかったと挙げた学生が多いことは、「話す」以外に授業内容とし取り入れの検討を促している。その一方、学生がどのくらい「話した」感覚を得られるかが問題のようだ。学生の求める「実践」的な会話とは何なのかをより深く理解することや、「話す」スタイルの工夫が必要である。

(2-2) Listening

Listeningの授業について79%が好意的な評価をしている。Listeningの授業で良かったことについては25の回答を得た。リスニングの量や早さ（早いので勉強になった）が良かったは7件にのぼった。ネイティブの先生であるだけでリスニングの練習になったとの回答は4件あった。映画、TEDなどの教科書以外リスニングが楽しかったという意見も4件あった。改善に関しては、15の意見が書き込まれた。実際に使われている英語、TEDや曲などをしてほしいとの要望が5件と一番多い。続いてTOEICやTOEFLに対応するような問題や教材のレベルにしてほしいという意見が3件。「リスニングに授業になっていなかった（ほぼspeaking）」という意見も見受けられた。

Listeningの授業は、ネイティブの教員によることが授業満足度の要因の1つになっていることがはっきりと浮き彫りになった。また、教材がチャレンジできるものであったことが好評であることは、英語インテンの学生の積極性をうかがわせた。テキスト以外リスニング題材で学習することも評判が良いだけでなく、要望も多という結果は、今後授業内容の検討材料になるだろう。また、テスト対策をしてほしいという意見があったことは意外であったが、よい発見であった。

(2-3) Reading

Readingの授業について85%が好意的な評価をした。良かったことについて27件の回答があり、テキスト以外の本を読んだことを挙げたのが11件だった。速読がよかった、読むのが早くなったというコメントは4件。先生の解説が丁寧、日本人の先生の授業が分かりやすく楽しかったなどもあった。改善については

15の意見があり、一番多いのはテキストのレベルが低すぎる、テキストが合っていない、問題が少ない等、テキスト関連が9件に上った。物語を読みたい、単語ノートをつくらせるなどの工夫をしてはどうかなどの意見もあった。

ネイティブ教員に対するコメントがなかった一方、日本人の教員の丁寧な指導が好評であった。様々なジャンルの読み物を読むことや、速読などの技術的な指導を学生は有効であったと考えていることが分かった。今回テキストへ批判が集中したことは、今後英語インテンのテキスト選定の際や授業の進め方において、学生の意見に耳を傾けることの大切さを示唆している。また、学生側から学習方法について提案があったことも興味深い。学生の高校までの学習経験が豊富であることを示していると同時に、授業が「テキストを教えること」になってしまっていて、学生の興味や目標に寄り添っていない反省をする必要があるだろう。

(2-4) Writing

Writingの授業について88%が好意的な評価をしていて、アンケートを行った5つのスキルの授業の中で最も高い評価を得た。良かった点について27の回答あり、構造や書き方が分かった、ライティングに慣れたなどの意見が19件。次に、添削をしてくれた、アドバイスがもらえた、筆記体の練習が役に立ったなどが6件。日本人の先生がよかったと、名前を挙げた意見が4件あった。改善には合計14の回答があり、添削をもっとしてほしい、すぐにしてほしいが3件。ネイティブの先生だとわかりにくかったが2件。日本語で説明してほしい、書く題材がつまらない、レベルを上げてほしい、宿題が多い、もっと多くの手本を示してほしい、授業中に書く時間がほしいなどのコメントもあった。

丁寧な解説、指導、添削によって学生はスキルアップを実感できたことが見てとれる一方、Writingの授業でのみネイティブ教員への不満がみられた。解決策としてWritingの授業はすべて日本人教員が受け持つべきだとする程単純なことではないことは明白である。日本人教員、ネイティブ教員に関わらず、授業で有効なスキルやテクニックを教員の間で共有することの大切さを浮き彫りにしている。個別の添削への期待や幅広い題材で書きたいという主に授業に

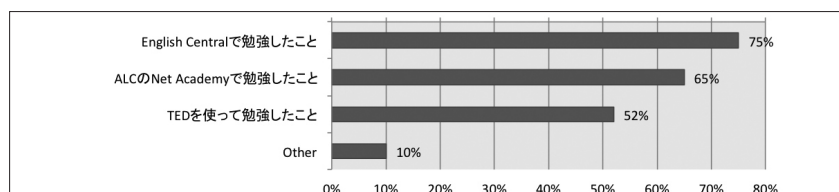
対する意欲が要望として見られることは、学生のポテンシャルに十分に役立っていないことでもある。やる気のある学生の要望と希望を、教員がどのように授業の目標へと引き上げて行くのが今後の課題であろう。

(2-5) Language Development

Language Development（以後LDと表記）の授業について86%が好意的な評価をした。LDの授業で良かったことを、アンケートを行った2017年春学期から必修課題になったEnglish Centralとアルク社NetAcademy 2の学習ソフトを中心にして尋ねると、2つのソフトが学生に好評であったことが分かる（図5）。多くのプレゼンテーションの動画を掲載しているTEDを学習教材として使用している教員がいるときいたので、選択肢に入れておいたが、ほぼ半数に受け入れられるに留まった。Otherは、コメントをしても良いことになっていたが、コメントはなかった。

改善に対して12の意見が寄せられた。NetAcademy 2に対してつまらない、時間の無駄といった否定的な意見は3件きかれた一方、NetAcademy 2をMacでも使えるようにしてほしいや、もっとやりたかったという肯定的なコメントもあった。課題が多いや洋画の字幕なしがきつかった、教材は面白いが課題が重くて終わらない、飽きたという意見もある。

図5：今までのLDの授業で良かったことは何ですか。（複数回答、コメント可）

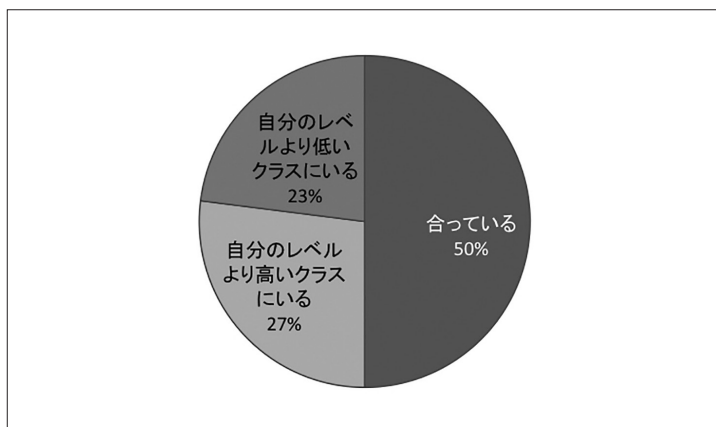


LDの授業に関しては、スキル別での評価が高いものの、主に1つ1つの教材に対する学生の好き嫌いの意見が多く、授業全体の良かったことや要望がはっきりとしない結果となった。

(3) レベルとプレイスメント・テスト

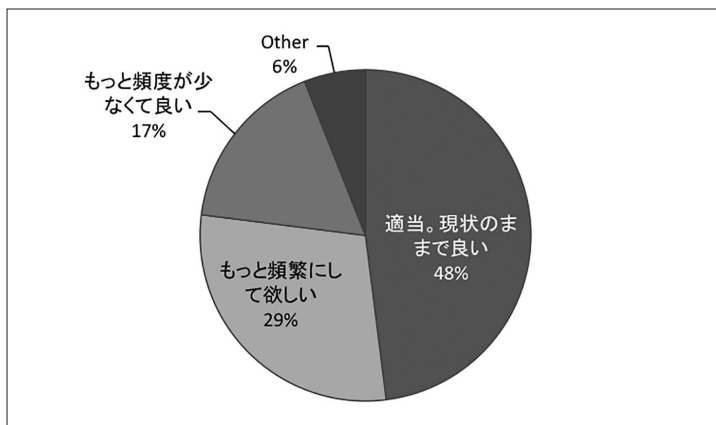
現在の学生自身が割り当てられているクラスのレベルに関しては、ちょうど半数が適切であると回答した（図6）。自分のレベルより高いクラスにしていると感じている学生は27%で、低いと感じている学生は23%となった。スキル別の満足度が高いことに比べると、クラスのレベルに満足しているのが半数であることは低い結果と考えても良いだろう。今後授業に対する満足度とレベルに対する満足度の関係性を今後詳しく調べる必要がある。

図6：現在の自分のレベル（クラス）についてどう思いますか。



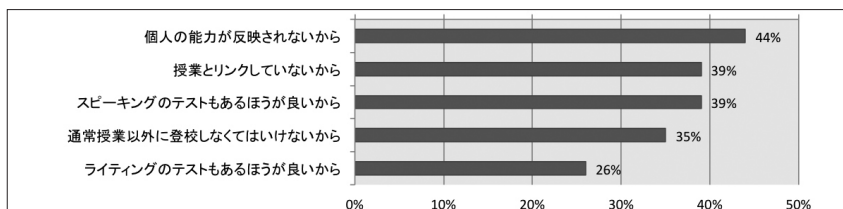
次に、クラス替えの頻度についてアンケートをした。クラス替えの頻度は48%が適当であると答えているが、29%はクラス替えの頻度を上げてほしいと考えている（図7）。その他の6%は、クラス替えをしなくて良い（4%）と毎学期のクラス替え（2%）を希望している。英語インテンの良かったところとして「友達が増える」や「友達から刺激をもらえる」が挙っていることを考えると、ほぼ半数が2回のクラス替えが適当だと思っているのかもしれない。2番目により頻繁のクラス替えの希望が多いことは、自身の学力を毎学期知りたい気持ちの現れだと見て取れる。せっかく英語インテンに入ったのだから、自分のがんばりをクラス替えというかたちで結果をみたいのかもしれない。

図7：クラス分けの頻度についてどう思いますか。



ブレイスメント・テストは、この時点ではリスニングとリーディングのみをテストするTOEFL ITP（International Testing Program：団体向けTOEFLテスト）を使用していた。テストの種類については、適切であり、変えなくてもよいという学生は56%に上った。一方、テストを変えた方がいいという学生は44%いた。「変えたほうが良い」の理由として、個人の能力が反映していないこと、授業とリンクしていないこと、2つのスキルに限られたテストであることが挙げられた（図8）。その他の意見として、テストのミスしたときに悪い結果になる、スキル別のテストでスキル別にクラスを分けてほしい、Jクラス内のレベルの差が大きい、楽に成績を取るために下のクラスに行きたい人がいる（テストでわざと悪い点をとる）があった。

図8：テストを「変えたほうが良い」と応えた理由は何ですか。（複数回答、コメント可）

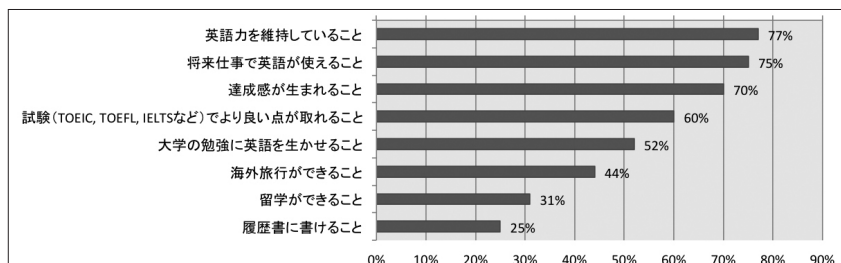


プレイスメント・テストとしてのTOEFL ITPは、問題数が多くテスト時間が長い、授業のない週末の半日を使って行われていた。わざわざテストのためだけに学校に来なくてはいけないことや、内容がTOEFLに準じているためアカデミック中心の語彙でリスニングのスピードも早く難しいので、学生に不評なテストだと思っていた。そのため、56%の賛成意見には驚いた。英語インテンの学生は、難しいことへのチャレンジ精神が旺盛な証なのかもしれない。しかし同時に、テストの結果が強制的にクラス分けを左右し、自分の本来の能力より下のクラスならばより良い成績を取れる可能性が高くなることから、学生が故意にテストの点数を下げている問題点が浮き彫りとなった。プレイスメント・テストのみによるクラスのレベル分けと成績の取りやすさの関係に、どのような解決策があるのか考えなくてはならない。

プレイスメント・テストとしてのTOEFL ITP使用はアンケートを行った2017年度で終わり、2018年度からCASEC (Computerized Assessment System for English Communication) へ移行が決まった。CASECは、学校に来なくてもインターネットが使える環境さえあれば自宅でも受けられ、コミュニケーションに不可欠な語彙、表現の知識や聞く力を4肢択一方式で空所補充するテストとListeningのテストから成り、テスト時間も40-50分程度である (2018)。TOEFL ITPと同じくスピーキングとライティングがないテストだが、形式やテスト内容はだいぶ異なる。今後このテストへ移行した効果と改善点を見守っていく必要があるだろう。

英語インテンを5セメスターに渡って勉強した修了時に期待することを、最初の項目の「英語インテンに入ろうと思った理由は何ですか。」で使用した回答選択肢を土台として学生に質問した。その結果、英語力を維持していることと、将来英語がつかえることに期待していることが分かった (図9)。現在の英語力を落としたいくない、忘れたくない、そのために英語を使い続けたいという希望と、高校までに習得した英語力を就職に向けて伸ばしていきたい期待がみてとれる。その一方、履歴書に書けることを期待している学生は少なく、また試験でのスコアや留学への期待はそこまで高くないことで、学生の関心が就職やビジネスシーンに集中していることが分かる。

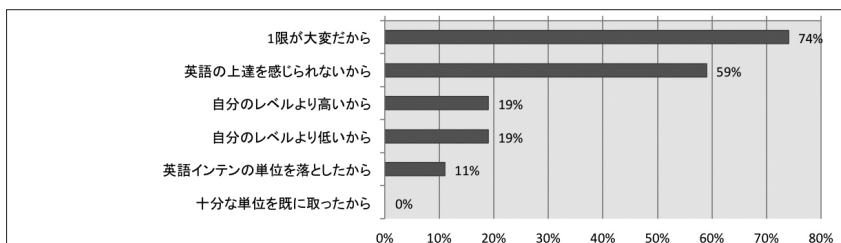
図9：修了した時に期待することは何ですか。(複数回答、コメント可)



(4) 英語インテンの継続

英語インテンをやめようと思ったことがあるかという質問に対し、「ある」と答えた学生は51.9%、「ない」は48.1%だった。「ある」と答えた学生の理由のトップは、「1限が大変だから」であった (図10)。

図10：英語インテンをやめたいことが「ある」と答えた理由はなんですか。(複数回答、コメント可)

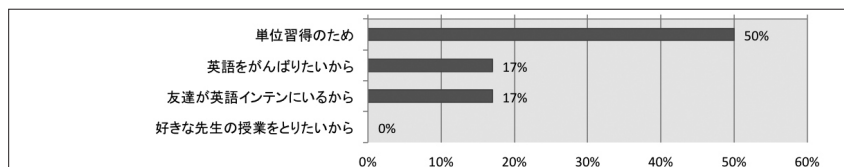


英語インテンの授業は月曜から金曜の1、2限に集中している。スキル別の要望にも「遅刻が厳しいのが嫌だ」との意見が何回も見受けられた。これほど多くの学生が1限の授業を避けたい傾向であることを受けて、現在の授業体制に改善の余地があるのか検討するべきであろう。第2の英語インテンをやめたい理由は、半数を超える59%の学生が英語の上達を感じられないを挙げた。75%の学生が各スキルの授業が期待通りだと思っている中で、上達を感じられないのは深刻な状態である。ただ、英語インテンの単位を落としただけでは、コー

ス自体をやめたいと思う学生が少なかったことは興味深い。また卒業単位を満たすために英語インテンを理由しているわけではないことは、学生の純粋な英語を学びたい意欲が伝わってくる。自分よりレベルが高いあるいは低いと感じたクラスにいとやめたいと思う結果が同じことから、高い低いに関係なく、レベルに合ったクラス分けが学生の動機付けに大事であることが分かる。その他の意見として、自分のレベルに合わない成績が下がったから、実力で評価してほしいと、成績に関するものが2件。他の言語を学びたいから、とコース変更希望が1件あった。先生の当たり外れがある、と合計4件のコメントが寄せられた。

既に英語インテンの単位を落としていて修了証が出ない学生に、どうして英語インテンの授業に参加し続けるのかを聞いたところ、この項目を回答したのは6名だった。第1の理由は単位取得のためであった（図11）。英語インテンは、すべての単位を一回で取得しないと修了証が発行されない。単位を落とした時には再履修ができない。フェリス女学院大学では、語学教育プログラムとして、英語と初習言語のインテンシブ・コースの他に、スタンダード・コースや2ヶ国語コースを提供している。1年前期の終わりに学生自身がコース選択をするのだが、一度コースが決まると他のコースへの変更は簡単ではない。そのため、例えば単位を落として修了証がもらえなくなったとしても他のコースへの移行を許されることはあまりない。結果として、修了証をもらえなくても、卒業要件を満たす単位取得のために自身が最初に選んだコースに在籍せざるを得ない。アンケートの結果もそのことを指していると思われる。ただ、英語を頑張りたい、友達がいるからを理由（17%は、それぞれ1名の回答）として英語インテン

図11：既に英語インテンの単位を落としたことがある学生に質問します。
英語インテンを続けている理由は何ですか。（複数回答、コメント可）



を続けている学生もいることと、その他のコメントで「将来の夢のため」という意見もあることから、学生の英語学習への高い意欲が伺える。もう一つのコメントに、職員に止められて多くの人がコース変更ができず、コース変更をする労力が無駄と感じたから、があった。単位を落とした場合でもコースに在籍し続けなければいけない現状に対する学生の率直な体験談である。

アンケートの最後に、英語インテンに希望・要望・改善することを自由記述でお願いし、17の意見が寄せられた。クラス分けとレベルに関してが5件あり、クラス分けを全セメスターでしてほしい、クラスを固定してほしい、クラスのレベルを自分で上下したい、自分に合ったクラスに行きたい、もっと上のレベルを作って欲しいだった。授業と成績に関しては、1限の遅刻が厳しい、1、2限の他の授業が取れない、クラスによって1限がある無しの不公平をなくして欲しい、時間割を自分で決めたい、と午前のみの授業に対する不満が目立った。他にクラス替えに伴うテキストの購入を改善して欲しい、1つの授業の単位を2単位にして欲しい、単位を落としても修了証をもらえるようにして欲しい、外国人と話せる課外授業が欲しいに加え、成績の付け方（上のクラスほどGPAが下がる）に対する疑問を投げかけられ、英語インテンのシステムについて学生側から具体的な改善案が出された結果となった。

4. 今後の課題

今回のアンケートを通し、全体として、フェリス女学院大学が大事にしている少人数制による授業が学生にも受け入れられていることと、現状の英語インテンがクラス分け、レベル、教員、授業内容においてポジティブに捉えられていることがわかった。また、各スキルやコースの修了に対する意見を通して、学生の英語に取り組む意欲がとても高いことが明らかになった。

改善点として浮かび上がったことは、4つに分類される。まずは英語インテンに対する学生の期待と英語インテンの修了目標の差を埋めることである。学生は英語が好きで、大学で役に立つ英語より、就職で使える英語を目指していることが分かった。しかし英語インテンの目標は、ホームページで「TOEFL

のスコアアップを目標に高度な英語運用能力を養成」することとし、シラバス(2017)には「英語インテンシブ・コース修了時の到達目標はTOEIC 650～750点、英検 準1級～1級、TOEFL iBT 61～79点、CEFR B2～C1です」と記載があるだけである。テストスコアなどで到達目標が示されているが(注:大学のホームページでは到達目標はTOEFL iBT 79-80となっている)、授業でこれらのテスト対策は行ってはいない上に、コース修了時に上記のテストやTOEFL ITPを受ける制度はないので、結果として学生がどの程度学力が伸びたかは学生も教員も分からない。「上達が感じられない」という意見に納得させられる。英語インテンでビジネス英語を取り上げるかは教員に任されていて、現実にはそれほど多くのクラスで扱っていない。学生の就職で役立つ英語を習得したいという要望と英語インテンの目標は合っていない。本学ホームページでは他に「世界を知るためにも、世界で活躍するためにも、英語を確実にマスターしましょう」とある。この方が学生の期待に近いかと思えるが、シラバスはあくまでアカデミック中心である。アカデミックと実用英語は相反するものではない。両立することも可能であるが、英語インテン自体がどうしたいのか検討して、方向性を教員にも学生にもはっきりと提示したいものである。

例えば慶応義塾大学SFC(湘南藤沢キャンパス)での英語インテンシブにおいての「英語プロジェクトの目標は、シラバスが示すように、世界中の大学や大学院と英語でリサーチが行えるなることである」とし、知識伝授型から学生が問題を発見し解決する自己発信型を基本としている(鈴木、2003)。しかし、プロジェクトを行う上で基礎的な英語力が足りなかったり、不安に思う学生はいる。語彙量に不安がある学生を例にすると、「ボキャブラリー・ワークショップ」を設置して語彙を増やすことで、他の発信型授業との相互効果があったとしている。大学の明確な目標を学生も理解し、それに向かって学生自身も学習を進める一方、大学からのサポートがさらに目標へ学生を引き上げている様子がうかがえる。本学に於いて、学生の動機と期待と、アカデミック英語を中心とした英語インテンの目標の差をどのように埋めていくのか、英語インテンの最終目標を再検討し、より具体的な目標や結果を掲げることが必要であるだろう。

2つ目は、午前の授業に対する学生の不満への対応である。クラスによって1

限がある、ないの不公平がある。またそのクラスはプレイスメント・テストの結果で自動的に決まってしまうので学生が選ぶことができない。不満があることは明らかなので、この現状を果たして改善すべきなのか否かを検討するべきだろう。もし改善しないのであれば、学生が不満に思わないように説明をしたり、遅刻に対する対応を統一するのか等を検討する必要があるだろう。改善するのであれば、教員のスケジュール、他のコースや他の科目との兼ね合いといった、様々な要素を一緒に考えていく必要がある。

次に、クラス分けの時期とクラスの変更の検討である。学生からアンケートを行った当時の英語インテンのシステムがある程度支持されていることが分かった。しかし、プレイスメント・テストとして使われているテストは、すでにTOEFL ITPからCASECへ移行した。それに伴い、クラス分けの頻度も2018年度から増加へ変更になる予定である。新しいシステムに対する学生の意見もこまめに調査し、参考にしていきたいと考える。なぜなら、レベルが自分に合わないクラスに対する不満、あるいはクラスの変更希望は英語インテン継続の動機に深く関わるからである。2021年から始まる大学入試での英語試験は、TOEFL iBT、IELTS、TOEICなど申込みのあった民間のテスト団体から選ばれる（朝日新聞、2017）。学生が大学受験のために勉強するようになるテストのことも含め、常に他のテストの利用検討も続けていきたい。

最後に、成績とクラスの増設についての改善がある。より良い成績の獲得を狙ってプレイスメント・テストの点をわざと低くしている学生がいる現状をしっかりと受け止め、特に、上位クラスで良い成績が取にくいことは、留学や卒業後の進路にも関係することなので慎重に検討したい。それに伴い、現在の10クラスから、もっと細分化したクラス設定が必要かどうか考えなくては行けない。同時に、単位を落とした学生の再履修を認めるかの検討も必要だ。英語インテンを高い意欲と期待を持って選ぶ学生に、言語習得を徹底できるチャンスを広げるべきだと思うが、大学全体のシステムとして可能なのか慎重に調べなくては行けないだろう。

以上の4つの改善点は、今回学生の声から見てきたものである。今後のコース全体の改善の大きなヒントとなるだろう。

各スキルの授業においては、75%以上の学生がある程度期待通りであったと評価をしていることから、期待通りでないことに焦点を当てると、今後の課題が見えてくる。

Speakingの授業は、今回アンケートをした5つのスキルの中で学生の期待に一番応えていないことから、早急な見直しが迫られている。一言に「話す」と言っても、会話、プレゼンテーション、ディスカッション、ディベートなどの種類があり、その中でも意見を述べる、要求する、説得する、反論するなどの様々なテクニック以外にも、聞き返す、言い換えるなどの方略的なテクニックがある。また、語彙、フレーズ、発音などの基礎的な知識も必要であると同時に、異文化の理解も必要である。留学、ビジネス、バイト先、友達との会話など、目的によっても学習する内容は異なってくる。学生の求める「実践」とは何か、学生が感じる「話した満足感」とは何かを考え、同時に英語インテンとしての方向性を示しながら、授業で提供していく知識やスキルを精査しないといけない。

Listeningの授業は、テキストだけに頼ったものではないことが浮き彫りになった。テキスト以外に、映画や音楽、TEDなどのオーセンティックな教材も取り上げることが学生から希望されている。さらに、聴く技術に対しても関心が寄せられた。Listeningの授業のみ試験対策をして欲しいと声が上がったことも、検討するに値するだろう。ネイティブ教員であるだけでListeningの練習になるという意見に対しては、学生の視覚的あるいは心理的な要因である可能性も高いので、慎重に対応する必要がある。

Readingの授業では、何よりもテキストが不評であったことを反省する必要がある。アンケートを行った学期が終了して2ヶ月後で開かれたFD会議では、教員側からはそれほどこの時に使用していたReadingのテキストについての批判は聞かなかった。このことは、学生と教員との考えや思いの開きを明確にした。教員が良いと思っているものは必ずしも学生の期待に応えるものではないのだ。また、テキストだけを使った授業ではなく、様々なテキストを読むことが学生の満足度につながることも分かったことで、テキストの意義や使い方を見直すことは必須である。学生から単語帳を作ってはどうか、などと学習方法

に提案があったことも、学生の英語学習に対する意欲を、もっと授業に反映するように教員に新しい授業スタイルを提案するきっかけとしなくてはいけないだろう。

今回5つのスキル別授業についてアンケートをとったが、実際は講読という日本人教員が受け持つ授業が英語インテン期間中2セメスターある。単に今回アンケートに含めるのを忘れてしまっただけなのだが、次回は講読も含めたすべてのスキルについて学生の意見を聞きたいと思う。この科目のみ日本人教員が教えることに限定されている影響も含め、講読とReadingの授業の特色の違いを中心に、今後この2つの授業をどのように進めていくか示唆してくれるだろう。

Writingの授業は、教員のそれぞれの教授スタイルに学生が異なる反応をした印象を受けた。丁寧な解説と添削が学生には好評であるが、そのために日本人教員の方がネイティブ教員よりも適任であるという短絡的な結論は出せない。ライティングの構造や、書くことに慣れたことに評価が集中したが、英語インテンではアカデミック・ライティングしか行っていないことで、題材やスタイルに制限が出てしまうことを再度検討する必要があるだろう。

LDのシラバス（2017）に於ける授業の概要は、学習ソフトやインターネットを使って学生の言語スキルを積み上げることと、プレゼンやレポートを行くことで、学習進度はTOEIC様式のテストなどを使用して図るとしている。また授業到達目標は、アカデミックな語彙と文法を取得することで試験のスコアを伸ばし、受動的スキル（リーディングとリスニング）を鍛えることであるとしている。学習ソフトの使用に関しては、概ねポジティブであったが、それがスキルアップにつながったのかを知るために、シラバスにあるTOEIC様式のテストが有効なのか検証が必要である。TEDなどのインターネットを使うことは、「字幕がないときつい」などの意見から考えると、教材として使うには教員の工夫が必要であることは明らかで、またこれがどのようなスキルを伸ばす目的なのか、試験対策と受動的スキルの上達に直結するのも検討しなくてはいけないだろう。TOEICとTOEFL対策として、リーディングとリスニングのスキルを伸ばすことが授業の一環であるとシラバスに記載されているものの、学生からスコアが上がった、下

がったとの声はきかれなかった。学生は授業に対して好意的な評価の反面、授業自体の目標が明確でないことで、要望や改善の意見があまり出なかったと想像できる。学習ソフトが好評であることは良いことだが、それをどのようにLDの授業の位置付けていくのか、またLDの授業自体の目標設定を再度見直す必要がある。

英語インテンの授業に関して、科目に共通して今後は3つの点を考えるべきであることがわかった。1つは、教員の配置について、それぞれの教員の強みを生かすようにするにはどのようにするのが良いのかということ。2つ目は、より良い授業を探究していくために、教員の知識と技術の共有をどのように図るかということ。最後は、学生の興味ややる気を引き出しつつ、幅広い英語に触れるために、テキストとテキスト以外の教材をどのようにバランス良く使用できるかということである。

ネイティブ教員については、文部科学省の中学校・高等学校での英語教育において「ネイティブスピーカーの活用促進」を掲げている（2003）このことから分かるように、ネイティブ教員は英語教育では欠かせない位置づけとなっている。しかし、ネイティブの定義は日本では狭く（Joe, 2010）、また「英語教育におけるネイティヴ・スピーカーとノンネイティヴ・スピーカーの区別は全く無意味になった」という小田（2011）の主張も今後教員の採用やクラス担当を決める際の議論材料としていくのがこれから大切である。さらに教員全体に関しては、例えばICU（国際基督教大学）の英語プログラムには出身国や国籍、母語、そしてランクも異なる教員が33人在籍しているが、目標にむかって毎月開かれるELP会議で議論を交わし、年に1回はELP研修会で技術の共有と向上を図っているという（守屋、2006:186-189）。このような教員全体の取り組みは、本学に於いて、教員全員が英語インテンの目標達成のために力を合わせるためにネイティブ教員、日本語教員の線引きを薄め、各々の教員の強みに注目していくための参考になるだろう。

テキストに関しては、東洋英和女学院大学での英語教育での取り組みが参考になるかもしれない。1冊だけを指定テキストとしたことに対する教員の反発の改善として、指定する教科書を原則複数にしたところ、学生の評価にバラツキが多かったことを受け、テキスト選定の重要さや難しさを反省。結果、教科

書選定のための会を発足し、すべての先生に毎年アンケートをとり、検討を深めているという（鳥飼&進藤、1996：112-116）。学生、教員、そしてテキスト選考担当の苦悩は同じでも、今後本学の英語インテンでは様々な工夫を考えて改善に取り組みたいと考える。

最後に、今回のアンケート実施の反省を3点挙げる。まず、アンケートの回収率が低かったことを改善したい。自分一人では、英語インテンを履修しているすべての学生の授業を受け持っていないので、全員に直接アンケートをお願いすることができない。今回他の嘱託教員の協力にもらったが、結果として全クラスに告知できたかは分からない。このことは2年生の回答が多く、3年生の回答が少なかったことでも分かる。今後、告知の統一を図る手段を考える必要がある。また、今回の告知方法もアンケートのWEBアドレスを黒板に書くか、フェリス・パスポート上で教員の担当学生への電子掲示することの2つに限られていた。黒板に書く場合は、教員が直接学生にアンケートのお願いをできるのが利点であるが、アドレスの書き間違いやアドレスの入力の手間は大きな負担である。電子掲示の方がアドレス入力などの手間が省けると思われるが、掲示にわざわざアンケートのためにアクセスしてくれるか、あるいはどれほど掲示に注意を払ってくれるかの不安は残る。アンケートを紙ベースにする選択肢もあるが、教員の協力が得られるか、また、教員がいる場で正直な記載ができるかが課題であろう。アンケートはフェリス・パスポート上でも作ることができるが、告知の問題は残る上に、通常の「授業に関するアンケート」と学生が混同してしまうことは避けたい。Googleの他にもアンケートを無料、あるいは有料で作れるインターネットサイトはある。それぞれの特性も理解し、履修学生全員に確実にアンケートを届けるための最善の方法を模索したい。

次に、アンケートを実施する適切な時期はいつかが問題である。今回はセメスターの終わりにしたが、内容によっては英語インテンに入る前、セメスターの中旬、インテン修了後、卒業時期も考慮する必要があるかもしれない。レベルごとに質問を換える必要もあるかもしれない。学生の素直な気持ちをくみ取るために、適切なタイミングとそれに伴う適切なアンケート内容を検討したい。

3つ目は、アンケート内容の精査である。まず、スキルの質問項目に講読を

入れ忘れてしまったことは大きなミスであったことは認めなくてはならない。その他に、LDの質問項目が授業の様子が伝わらないものになってしまったことは、次回すぐに改善したい。今回のアンケートは始めて行うため学生からどのような意見が集まるのか分からなかった。ある程度予想をして無制限複数回答形式や自由回答法を多く使用したが、より正確な回答を得るために、2項選択回答形式や順位回答形式の有効性（辻&有馬、1995）にも注目し、改善をしていきたい。それ以外に、プレイスメント・テストが変わり、頻度も変更になった英語インテンの過渡期にふさわしいアンケート調査は何かを考えることも今後の課題である。

5. おわりに

今回のアンケートは、英語インテンに対する学生の意識調査として多くのことが分かり、有意義であったと思われる。しかしながら、同時に英語インテンへ多くの課題を残した。

朝日新聞の「ひらく 日本の大学」（2017）では、学生の人数に対しての教員数をST比とし、その数値が少ない程少人数であり、きめ細やかな教育がされているとした。特にST比が20未満では、きめ細かさが浮き彫りとなった。記事では社会化学系学部の結果を中心に、少人数教育における課題解決型の授業導入やグループ発表、試験のコメント返却などで、学生の意欲を高めながら学びの成果を上げる努力を紹介した。本学の英語インテンでは、1クラスのST比は18以下と考えられる（1クラス18人上限のため）。この強みを、もっと生かすにはどうすればいいのか、今後より一生の試行錯誤していかなくてはいけないと思われる。

他大学でも、英語教育には様々な取り組みがされ、実績が発表されている。例えば、ICUではスキルの授業の他に、トピックを掘り下げて学問的思考能力の育成を図るために講義形式の「Narrative Presentation」という一斉授業を設けている（藤井、2006）ことは、現在の本学の6つのスキルのみに分かれた授業に対して改善の余地を示している。また、慶応義塾大学では「インテンシブ

英語からの脱却」として、「インテンシブ」を語学学習初期の段階に必要なコースと位置づけ、初習言語とは異なるカリキュラムをとると同時に、3,4年生で英語の授業がなくならないようにモジュラーという概念でコースを構築した（鈴木、2003）。本学では、英語インテンの他に、初習外国語インテンシブ・コースがある。そのカリキュラムと英語インテンはどのようにバランスを取るべきなのか、よい見本になりそうだ。その他本学では英語を学習するために、スタンダード・コースと2カ国語コース、選択科目もある。英語インテンと英語スタンダードは内容、レベルともに、どのような違いがあるのだろうか。2カ国語コースで英語にもう1言語プラスして長期間学習することで、英語学習への効果、または相乗的な学生の成長にどのような影響があるのだろうか。大学としてどのコースに進むと、どのような言語習得が期待されるのかデータ収集をすると、その結果を英語インテンはもちろん、フェリスにおける語学教育に反映できるのではないかと考えられる。

嘱託教員として期限や大学への関わりが制限されているため、できることは少ないかもしれないが、今後のフェリス女学院大学の英語インテンを中心とした語学教育の改善に貢献と尽力したいと思うと同時に、大学、教員、学生のより一層の発展を願わずにはいられない。

[参考文献]

- 朝日新聞「ひらく 日本の大学：細やか教育する大学は」2017年12月12日付朝刊, 13 (18).
朝日新聞「英語共通テスト：民間7団体申請」2017年12月27日付朝刊, 14 (30).
「英語III (Language Development) シラバス」(2017) フェリス女学院大学.
小田眞幸 (2011) 『英語教育をめぐる世論と専門家の役割』 玉川大学文学部紀要『論叢』第52号 pp. 65-173.
鈴木佑治 (2003) 『英語教育のグランド・デザイン —慶応義塾大学SFCの実践と展望』 慶応義塾大学出版会.
辻新六・有馬昌宏 (1997-1995) 『アンケート調査の方法 —実践ノウハウとパソコン支援』 朝倉書店.
鳥飼玖美子・後藤久美子 (1996) 『大学英語教育の改革 —東洋英和女学院大学の試み』 三修社.
フェリス女学院大学ホームページ「語学科目 教育の目的」, <<http://www.ferris.ac.jp/>>

- education-research/common-course/language/> 2017年12月1日アクセス.
- 藤井彰子 (2006)「Narrative Presentation講義」, 富山真知子編『ICUの英語教育 —リベラル・アーツの理念のもとに』 pp.123-129, 研究社.
- 守屋靖代 (2006)「ELPの運営」, 富山真知子編『ICUの英語教育—リベラル・アーツの理念のもとに』 pp.183-191, 研究社.
- 文部科学省 (2003)「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」, <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/015/siryo/04042301/011/002.htm> 2017年12月20日アクセス.
- 「CASEC: キャセック」 <<http://casec.evidus.com/>> 2018年1月4日アクセス.
- Joe, Melinda (2010)「Why do English teachers have to be native speakers?」, 『The Japan Times online : Lifestyle』 <<https://www.japantimes.co.jp/life/2010/04/15/lifestyle/why-do-english-teachers-have-to-be-native-speakers/#.WkR4b4XjfZs>> 2010年4月15日.

[文末資料：アンケート調査の質問項目は以下の通りである。]

1. 今何年生ですか。 ☐1年生 ☐2年生 ☐3年生
2. 英語インテンに入ろうと思った理由は何ですか。(複数回答、コメント可)
☐英語が好きだから
☐大学の勉強に英語が必要だから
☐留学したいから
☐将来仕事で英語を使いたいから
☐海外旅行したいから
☐試験 (TOEIC, TOEFL, IELTSなど) 対策になるから
☐英語を忘れないようにしたいから
☐卒業必要単位に容易に達することができるから
☐大学生活で何か頑張りがかったから
☐先輩に勧められたから
☐友達が英語インテンに入るから
☐英語インテンを修了したら履歴書に書けると思うから
☐Other
3. 今のところ英語インテンは期待通りですか。
☐期待以上です
☐期待通りです
☐ある程度期待通りです
☐あまり期待通りではありません
☐期待外れです
4. 今までの英語インテンで良いところはどこですか。(複数回答、コメント可)
☐英語を学ぶ時間が多い

- ☐学校の外でも英語を勉強するようになった
- ☐先生との距離が近い
- ☐少人数の授業
- ☐ネイティブの先生がいる
- ☐友達が増える
- ☐友達から刺激を受けることができる
- ☐留学に役立つ
- ☐English Central が使える
- ☐Other

SPEAKING

5. 今までのSpeakingの授業はどうですか。

- ☐期待以上です
- ☐期待通りです
- ☐ある程度期待通りです
- ☐あまり期待通りではありません
- ☐期待外れです

6. 今までのSpeakingの授業で良かったことを書いてください。(できれば具体的にどのようなアクティビティだったのか、覚えていれば先生の名前なども)

7. Speakingの授業で改善して欲しいことを書いてください。

LISTENING

8. 今までのListeningの授業はどうですか。

- ☐期待以上です
- ☐期待通りです
- ☐ある程度期待通りです
- ☐あまり期待通りではありません
- ☐期待外れです

9. 今までのListeningの授業で良かったことを書いてください。(できれば具体的にどのようなアクティビティだったのか、覚えていれば先生の名前なども)

10. Listeningの授業で改善して欲しいことを書いてください。

READING

11. 今までのReadingの授業はどうですか。

- ☐期待以上です
- ☐期待通りです
- ☐ある程度期待通りです
- ☐あまり期待通りではありません
- ☐期待外れです

12. 今までのReadingの授業で良かったことを書いてください。(できれば具体的にどのようなアクティビティだったのか、覚えていれば先生の名前なども)
13. Readingの授業で改善して欲しいことを書いてください。

WRITING

14. 今までのWritingの授業はどうですか。
- ☐期待以上です
 - ☐期待通りです
 - ☐ある程度期待通りです
 - ☐あまり期待通りではありません
 - ☐期待外れです
15. 今までのWritingの授業で良かったことを書いてください。(できれば具体的にどのようなアクティビティだったのか、覚えていれば先生の名前なども)
16. Writingの授業で改善して欲しいことを書いてください。

LANGUAGE DEVELOPMENT

17. 今までのLanguage Developmentの授業はどうですか。
- ☐期待以上です
 - ☐期待通りです
 - ☐ある程度期待通りです
 - ☐あまり期待通りではありません
 - ☐期待外れです
18. 今までのLanguage Developmentの授業で良かったことは何ですか (複数回答、コメント可)
- ☐ALCのNet Academyで勉強したこと
 - ☐English Centralで勉強したこと
 - ☐TEDを使って勉強したこと
 - ☐Other
19. Language Developmentの授業で改善して欲しいことを書いてください。

LEVEL & TEST

20. 現在の自分のレベル (クラス) についてどう思いますか。
- ☐自分のレベルに合っている
 - ☐自分のレベルより高いクラスにいると思う
 - ☐自分のレベルより低いクラスにいると思う
21. クラス分けの頻度 (1年前期・後期、2年後期) についてどう思いますか。
- ☐適当。現状のままで良い
 - ☐もっと頻繁にして欲しい

☐もっと頻度が少なくても良い

☐Other

22. クラス分けのテストについてどう思いますか。

☐適切。今のままで良い

☐変えた方がいい

23. 上記でテストを「変えたほうが良い」と答えた理由は何ですか。(複数回答、コメント可)

☐個人の能力が反映されないから

☐授業とリンクしていないから

☐スピーキングのテストもあるほうが良いから

☐ライティングのテストもあるほうが良いから

☐通常授業以外に登校しなくてはならないから

☐Other

24. 修了した時に期待することは何ですか。(複数回答、コメント可)

☐大学の勉強に英語を生かせること

☐留学ができること

☐将来仕事で英語が使えること

☐海外旅行ができること

☐試験 (TOEIC, TOEFL, IELTSなど) でより良い点が取れること

☐英語力を維持していること

☐達成感が生まれること

☐履歴書に書けること

☐Other

OPINIONS

25. インテン英語をやめたいと思ったことがありますか。

☐ない

☐ある

26. 上記で「ある」と答えた理由は何ですか。(複数回答、コメント可)

☐英語インテンの単位を落としたから

☐十分な単位を既に取ったから

☐自分のレベルより高いから

☐自分のレベルより低いから

☐1限が大変だから

☐英語の上達を感じられないから

☐Other

27. 既に英語インテンの単位を落としたことがある学生に質問します。英語インテンを続けている理由は何ですか。(複数回答、コメント可)

☐英語をがんばりたいから

☐友達が英語インテンにいるから

- ☐好きな先生の授業をとりたいから
- ☐単位習得のため
- ☐Other

28. 英語インテンに希望・要望・改善することがあれば書いてください。